

【書評】

乾正学著『わかる！できる！笑いがある！協同学習で創る 中学歴史授業のヒント』

(明治図書出版, 2014) 1,800円

原田智仁
(兵庫教育大学)

乾正学氏は、2004年から2012年まで神戸大学附属住吉中学校（現神戸大学附属中等教育学校）に勤務し、協同学習の理論に基づく研究と実践を深めてきた。同校の研究成果は、『生徒と創る協同学習－授業が変わる・学びが変わる』（明治図書出版、2009年）に詳述されている。協同学習とは、生徒が相互に力を合わせ、助け合いながら進めていくグループ学習を指しており、その基本的構成要素として、①相互協力関係、②対面的・積極的相互作用、③個人の責任、④小集団での対人的技能、⑤グループの改善手続き、の5つが重視される。要素自体には特段の目新しさはないが、これらを有機的に組み合わせて実践することで、授業が変わり学校が変わってくるという。

さて、本書において、乾氏は協同学習の具体的展開を、歴史授業を事例に説明する。「わかる！できる！笑いがある！」というタイトル通りの語り口であり、読む者を飽きさせない。多分、生徒もその語りに誘われて、グループで調べ、話し合い、課題解決をしているうちに、社会科（歴史）の楽しさを実感し、自ら学び考える力を付けていくのであろう。中学校社会科は、往々にして教師による教科書解説型の一斉学習に陥りがちなどに、協同学習の示唆するところは大きい。以下、主な事例を見ながら本書の意義を紹介しよう。

まず、本書の全体は次の5章からなっている。

1章 協同学習で創る授業への挑戦

～壁は常に自分の心！～

2章 生徒の「モード」を変える授業導入の「技」

～楽しくウォーミングアップを！～

3章 わかる！できる！笑いがある！授業「展開」の技～実況中継！日蓮が吼える！鎌倉新仏教がわかる！～

4章 わくわくドキドキ「研究授業」づくりの舞台裏～PDCAで進化する！～

5章 マンネリ打破！1時間ポッカリのスペシャル授業～生徒イキイキ！黄金の1時間～

第1章では、協同学習の基本的学習方法とそれを可能にする構成要素を説明する。そして、社会科を生徒にとって「わかる！できる！笑いがある！」ものにするためには、内容と方法への挑戦が必要であり、それはとりもなおさず教師自身の心の壁を乗り越えることを意味するという。

第2章では、生徒の気持ちを授業モードに切り替える仕掛けとしての導入の技を、大きく5つに分けて紹介する。第一は個人・小集団対抗クイズである。例えば、「室町幕府6代将軍足利義教はどのような方法で選ばれたか？」の問い合わせについて、個人やグループ間で対抗させながら授業への集中力を高めていく。解答は「籠」であるが、単なるトリビア的な扱いではない。「どう話し合っても後継者が決まらなかったから、均衡の原理で真面目に籠を使用した」のであり、それは「神様の意思を政治に反映させることを意味した」という。こうした中世の人々の見方考え方方に触れ、現代人との共通性や異同を考えることは、歴史学習を暗記物から解放する手立てとして重要だろう。この他にも、テレビの歴史ドラマの一部を見せたり音楽を聴かせたりして、視聴覚教材とクイズをリンクする方法が例示されている。

第二は、生徒に身に付けさせたい社会科の用語（前時までに学習した重要用語など）8～10個を、小集団メンバーで手拍子のリズムに合わせて唱えながら暗記させるリズムメモリーの手法である。例えば摂関政治の項では、「摂政・関白・藤原道長・藤原頼通・平等院・淨土信仰・紫式部・源氏物語」といった用語が挙げられる。第三は、歴史

カラオケとして、「線路は続くどこまでも」のメロディーに合わせて、日本や中国の時代を順に覚えたり、「アルプス一万尺」のメロディに乗せて、各時代の重要用語を覚えさせる方法である。第四は、歴史カラオケで習得した用語や流れを互いに関連付けてマッピングしていく学習ゲーム、第五は学習内容の確認と定着のために歴史川柳を創作させる方法（「諭吉さん 学問すすめて 塊つくる」等）である。

第3章では、協同学習の具体的な授業展開を、「鎌倉新仏教」を事例に説明する。この主題については、各宗派や教祖の名前と教えを表にまとめて暗記させる授業が一般的な中で、乾氏は日蓮という人物に焦点化し、日蓮の他宗非難（吼える！）を追求させれば鎌倉新仏教の概要や特徴がわかるのではないかとの仮説の下に、全3時間の単元を開発した。概要は以下の通りである。

1時間目は導入でリズムメモリー（御成敗式目・問注所・日蓮・法然・法華経・題目・念佛・阿弥陀仏）のウォーミングアップをした後に、問題を提示する。御成敗式目12条の「闘いや殺し合いのきっかけは（　）より起こる。その罪の重いものは流刑に処し、軽いものは召し籠めに処する。」の空欄に適切な語句を答える問題である。生徒に考えさせた後に、正解は悪口であることを伝える。そして、日蓮の立正安国論から関連部分を資料として配布し、日蓮の主張が悪口に当たるかどうかを判断させていく。次に、日蓮の時代にはどのような発言が悪口とされたのか、当時の資料を手がかりにまず個人で考え、続いて小集団で交流させた後に発表させる。それらを踏まえて、再度悪口と言えるかどうか個人で判断（セカンド・ジャッジ）させるのである。

2時間目も導入はリズムメモリーと日蓮に関するクイズを行い、本題に入る。前時の生徒の判断結果を集約すると、悪口説は「日蓮の主張は法然をばかにするもので、能力に関する悪口である」となるのに対し、悪口でない説は「日蓮の主張は、法然が主張する念佛を否定しており、批判である」となることを示し、悪口と批判の違いを説明する。つまり、悪口は人の身体や能力に向けられが、批判は人ではなく主張（論）に向けられることを確認する。また、悪口は言葉だけでなく、状況や場

所も意味をもつことを、辻説法する日蓮に石が投げつけられる絵を通して説明する。そして、三度目の個人思考・小集団討議を踏まえて、最終判断をワークシートに書き、全体で発表する。そして3時間目は、法然、日蓮、道元の主張に関する資料を通して、鎌倉新仏教の特徴が易行・専修・庶民性にあることを探究するとともに、現代と中世の悪口を比較考察させて、単元を終えている。

第4章では、単元「誕生！鎌倉新仏教」の研究授業づくりの舞台裏を、PDCAのプロセスに即してわかりやすく説明する。校内研修等で研究授業を迫られる中学校教師にとっては、学ぶべき点が数多く示されていいよう。筆者なりに解釈すれば、まずは教師自身が気になる好きなテーマを選び、とことん教材研究してみることである。そして、「何でだろう」といった疑問や「へえ、そうだったのか」といった納得につながるネタに着目し、学習内容を構成するのである。その上で、すべての生徒が参加できる協同学習を想定して学習過程を構成する。こうした授業準備（Plan）こそが、後の実践（Do）・反省（Check）・改善（Action）を支えることになるのである。

第5章では、投げ込み教材的な1時間の楽しい授業事例を紹介している。「邪馬台国の謎」、「源義経の謎」、「長篠の戦い—織田信長の戦略ー」、「江戸城無血開城—勝海舟の戦略ー」、「ヒトラーの野望とアンネの夢」の5事例について、①導入する単元、②本時のねらい、③教材化の視点と協同学習、④授業の流れ、⑤資料、⑥ワークシート、が具体的に示されており、今すぐにでも追試してみたい誘惑に駆られる内容である。

このように、本書は乾氏の20年に及ぶ社会科教師としての研鑽の結晶ともいべき書である。外来の学習論に依拠すると往々にして理屈っぽくなりがちであるが、乾氏の場合、協同学習を自家薬籠中の物としており、違和感を感じさせない。その意味で、是非多くの社会科教師に手にとってほしい書である。ただ一つ私が気になったのは、導入のクイズやリズムメモリーである。それらが現状ではある程度必要であり、生徒の多くが支持していることを承知しつつも、歴史学習の本質からは遠く離れた一種の妥協に思えて仕方がない。